

# 軍 事 史 学

第49卷 第4号

## 卷 頭 言

### 陸軍の脚気問題と堀内利国軍医監の功績

陸上自衛隊衛生学校内の医学情報史料室「彰古館」で脚気に関する資料調査をするなかで、『軍医団雑誌』第二三〇号(昭和七年八月)の「石黒子爵米寿祝賀会記事」が目にとまった。記事は上野精養軒に歴代軍医総監をはじめ四〇〇名以上を集めて盛大に祝賀行事が行われたことを伝えているが、私が注目したのは藤田嗣章元軍医総監の祝辞のなかの、軍隊で洋食化がすすむなかで「閣下ハ日本食ノ必要ナルヲ説キ当時ノ陸軍一等軍医森林太郎ニ日本食ヲ学問的ニ研究セシメラレマシテ之ヲ基礎トシ飽クマテ日本食ヲ主張」したという件であった。これは米麦混食により減少した陸軍の脚気患者が、日清戦争期に石黒忠恵野戦衛生長官による「精米六合」補給により激増したという歴史的事実を隠蔽するものといえよう。

釈然としないまま資料調査をすすめていると、『軍医団雑誌』第二四六号(昭和八年十二月)に掲載されている出井淳三陸軍軍医監の「故陸軍軍医監堀内利国氏ト陸軍脚気予防」と題する小論を見つけた。そのなかで出井軍医監は、矢島柳三郎編『麦飯爺』と、宇野宗一氏所蔵文書にもとづいて、堀内大阪衛戍病院長は、明治十七年に監獄において麦飯支給を開始して以来脚気が著減したことを聞き、近隣の監獄へと調査を拡大したこと、そして効果を確認のうえ上層部に建議し大阪鎮台内で米麦混食を実現し脚気の撲滅に成功したこと、やがて米麦混食は多くの鎮台に広がり二十四年以後になると陸軍内に脚気患者はほとんどみられなくなったことを論証していた。

もし日清戦争において米麦混食が実施されたなら、陸軍は脚気患者の激増で苦しむことはなかったであろう。そして海軍の高木兼寛医務局長とともに陸軍の堀内軍医監は、軍隊内の脚気撲滅の功労者として高い評価を得たに違いない。残念ながら現実はそのようにすすまなかったが、日清戦争以前の陸軍内の脚気撲滅に大きな功績があったことは事実であり、陸軍内にも常に根強い支持者がおり、後世までそれが伝えられてきたことを知り、一条の光明に出会った気がした。

(千田武志)